

## 論 説

### スターリング利益測定論の構造

—『企業利益測定の理論』を中心として—

伊 丹 清

- I. はじめに
- II. スターリング会計理論の内容
  - 1. スターリングの考察方法
  - 2. 「情報とコミュニケーション」についてのスターリングの主張
    - (1) 情報
    - (2) コミュニケーション
  - 3. 「測定」についてのスターリングの主張
    - (1) 測定的一般命題
    - (2) 測定条件
  - 4. スターリングの意思決定理論
    - (1) ディメンションの決定
    - (2) 意思決定理論—適合性基準の適用—
- III. 伝統的会計に対するスターリングの批判
- IV. おわりに

#### I. はじめに

ペイトン・リトルトンによって確立したとされる近代会計理論は、リース会計・インフレ会計等の現代の新しい会計実務の出現とともに、現代会計理論に取って代われようとしている。そして、近代会計理論に取って代わる現代会計理論は実に多様である。その多様な現代会計理論の中心をなすものが、情報会計理論である。情報理論は1960年代以降会計の分野においても唱えられ始めた。情報会計理論を代表するものとしては、アメリカ会計学会の『基礎的会計

理論』(A *Statement of Basic Accounting Theory*) をあげることができる。だが、この他にも多くの会計学者による情報会計理論がある。本稿では、とくにアメリカの有力な会計学者の一人であるロバート・R・スターリング(Robert R. Sterling) の情報理論をとりあげる。

理論は、実務に対して一定の役割をもつがゆえに存在する。理論は、そのような役割すなわち現実的意味をなくしては、その存在意義を失うのである。それゆえ、本稿ではスターリングの『企業利益測定の理論』(*Theory of the Measurement of Enterprise Income*) を手掛りに、スターリング理論がもつそのような現実的意味を探ることを主題としている。

## II. スターリング理論の内容

### 1. スターリングの考察方法

スターリングは、その研究の課題を「利益測定の適切なあるいは最善の方法の決定」<sup>1)</sup> においている。そしてまず、利益を定義することから始める。

利益の定義については、Hicks, Simon, Haig 等を引用して考察する。そして、一般的合意を得る利益の定義として、「2時点間の富の差額プラス消費」<sup>2)</sup> というものを採用している。スターリングによれば、この利益の定義自体には問題は存在しないという。問題は「富裕度 (well off)」測定へのアプローチの仕方、すなわち富の評価方法にあるという。つまり、評価概念をその考察対象としているのである。スターリングは、4つの代表的な評価概念を採りあげ、考察対象とする。すなわち、(1) フィッシャー伝統、(2) 会計伝統、(3) 現在市場、(4) ボールディングの定数の4つの学派である。

つぎに、スターリングは会社モデルを用いて考察を進める。その会社モデルは、貨幣と小麦の2財と小麦トレーダーから構成される。そして、小麦トレーダー

---

1) Sterling, Robert R. : *Theory of the Measurement of Enterprise Income*, University Press of Kansas, 1970 ; rpt. Scholars Book Co., 1979. p.351.

2) *Ibid.*, p.12.

一の代替案は、(1) 保持する、(2) 変換係数<sup>3)</sup>によって交換する、の2つである。

このモデルは2財から成るがゆえに、「異なる資産を保持する場合、『純資産』または『合計資産価値』を決定するために、一方の資産を他方の資産に換算して表わす必要がある」<sup>4)</sup>。ここで問題となるのは、「『適切な』または『正しい』評価係数が即座に明らかでない」<sup>5)</sup> ことである。換言すれば、適切なまたは正しい評価係数を明らかにすることが、問題を解決する方法だということになる。

スターリングの考察対象であるさきの4学派の評価係数を示したものがつぎの表である<sup>6)</sup>。4つの評価係数の内、3つは変換係数である。

学 派	評価係数名	適合する変換係数
フィッシャー伝統	割引期待値	将来—売却時
会計伝統	歴史的原価	過去—購入時
現在市場	現 在 価 値	現在—報告書作成時 点の価格
ボールディングの定数	恣意的定数	ナシ

つまり、スターリングはこの4つの学派の評価係数から選択することによって、適切なまたは正しい評価係数を決定しようというのである。

ところで、「評価の代理物— the valuing agent— (合計価値を表わすために選択される財) は、一定の評価係数 (単位—unity—) をもつと仮定」<sup>7)</sup> されている。そして、ここではそのような評価の代理物に貨幣が選択される。もし全資産が評価の代理物の形で保有されるならば、交換は完全と定義される。評価の代理物以外の形で一部分が保有される場合には、交換は不完全と定義され

3) transformation coefficient. 市場価格と同じものである。

4) *Ibid.*, p. 23.

5) *Ibid.*, pp. 24-25.

6) *Ibid.*, p. 25.

7) *Ibid.*, p. 26

る。交換が完全な場合には、利益測定には問題がない。交換が不完全な場合にのみ、利益測定の問題が発生するのである。すなわち、ここでは、不完全な交換という条件下での資産評価だけが、問題とされているのである。

換言すれば、交換が完全になる時点を待てば、利益測定には問題は発生しない。だがしかし、「測定の時機 (timing) が、交換の状態に関係なく、ある特定時点の外部の欲望によって決定される」<sup>8)</sup> (傍点一筆者) 場合には、問題は生ずる。つまり、その場合にのみ利益測定の問題が発生するのである。さらに、交換が不完全ならば測定は評価係数によって行われる。それゆえ、問題は評価係数選択の問題に変化する。すなわち、さきの4つの評価係数選択の問題となるのである。

その評価係数の選択に際して基準とされるものは何なのか。スターリングは、それを「『情報的内容』」<sup>9)</sup> だとする。「最大の情報を含む評価係数は、選択されるべき唯一のものだ」<sup>10)</sup> というのである。このことを踏まえて、スターリングは評価係数選択の基準としてつぎのものをあげる。

基準1：より多くの情報をもたらす評価係数は、少ない情報しかもたらさない評価係数よりも優れている。<sup>11)</sup>

以上のことを要約すると、まずスターリングは利益測定の最適な方法の発見を出発点にする。つぎに、そのために解決すべき問題として、富の評価方法をあげる。その評価方法を代表するものとして、スターリングは、(1)フィッシャー伝統、(2)会計伝統、(3)現在市場、(4)ボールドディングの定数の4つをあげている。スターリングは、この4つの学派の各々の評価係数の内から最適な評価係数を選択するということによって、利益測定の問題を解決しようというのである。そして、その選択の基準となるのが、「情報的内容」ということになる。

では、つぎにスターリングの主張の内容を見てみよう。

---

8) *Ibid.*, p. 35.

9) *Ibid.*, p. 36.

10) *Ibid.*, p. 36.

11) *Ibid.*, p. 36.

## 2. 「情報とコミュニケーション」についてのスターリングの主張

スターリングは、最適な評価係数を選択するために、さきにその選択基準として「基準Ⅰ」を設定した。続く問題として、ここでは「代替的評価係数の情報的内容の決定」<sup>12)</sup>をとりあげる。換言すれば、スターリングは、さきの4学派の各評価係数の情報的内容を決定できれば、評価係数選択の問題は解決する。すなわち最適な評価係数は決まるというのである。では、まず情報概念についてのスターリングの主張を見てみよう。

「情報」と「コミュニケーション」は時として同意語的に使用される。だがしかし、スターリングはその両者を区別する。「情報」は「有用なメッセージの記述に限定」<sup>13)</sup>(傍点—原文イタリック)される。「コミュニケーション」は「未評価のメッセージの伝達の一般的用語」<sup>14)</sup>(傍点—原文イタリック)とされる。そして、その各々について論じている。

### (1) 情報

スターリングは、「もしメッセージが有用ならば、2つの必要条件が存在する。すなわち、(1)真実性と、(2)適合性である」<sup>15)</sup>という。スターリングは、情報にとってはこの2つの属性が重要だというのである。まず「真実性」については、スターリングが述べるところのものを見てみよう。

「真実性の概念は『現実との一致』として表わしうる。メッセージは、『現実の世界』について何かを述べることを意味する言葉または記号から成る命題である。もしメッセージが現実の世界を忠実に表わすならば、そのときは我々は、そのメッセージは真実だ、と言うだろう。そして、このことは、そのメッセージが『情報』と呼ばれるための必要条件である。」<sup>16)</sup>

---

12) *Ibid.*, p. 39.

13) *Ibid.*, p. 40.

14) *Ibid.*, p. 40.

15) *Ibid.*, p. 40.

16) *Ibid.*, p. 41.

このように、スターリングはメッセージが情報であるためには、真実性＝現実との一致が満たされることが必要だと説く。さらに、メッセージを命題としてとらえ、その命題についても論及している。命題は、論理的思考と現実の世界 (the reasoning and the world) を内に含む『科学的リアリズム』<sup>17)</sup> を仮定すると、分析的命題 (analytic proposition) と偶然的命題 (contingent proposition) に区別できる。スターリングは、この両者の違いをつぎのような例を用いて説明している。

「たとえば、『Jhon は独身である』と『Jhon は結婚している』は、どちらも論理的に可能である。そして、どちらの命題が真理値 (the truth value) をもつかは観察に依存する。

分析的命題がゼロの『情報的内容』しかもたないと主張することは可能である。もし、我々が『Jhon は結婚しているかまたは独身である』と書いてあるメッセージを受け取るとするならば、我々は前もってそのことを知っており、したがって何の情報も受け取らなかったと主張できるだろう。」<sup>18)</sup>

このような例を用いて、スターリングは分析的命題を情報的内容をもたないとして排し、メッセージを「経験的陳述」<sup>19)</sup> である偶然的命題に限定する。そして、その検証が観察に依存することを強調するのである。

そのような真実性の適用についても困難が存在する。真実性を歪めるものの存在、すなわち「現実は、(1) 知覚の誤りと (2) 故意の偽りの表示による歪曲を受けやすい」<sup>20)</sup> という問題が存在する。スターリングは、この問題を「観察者間の合意が真実性に対するテストだと仮定」<sup>21)</sup> (傍点—原文イタリック) することによって解決しようとする。しかも、その観察者には、「資格ある (qualified)」観察者を想定する。「あるグループの人々は優れた知覚と解釈の能力

17) *Ibid.*, p. 42.

18) *Ibid.*, pp. 42-43.

19) *Ibid.*, p. 42.

20) *Ibid.*, p. 43.

21) *Ibid.*, p. 44.

をもつ」<sup>22)</sup>のだとして、観察者を限定するのである。このように、スターリングは真実性を資格ある観察者間の合意でもって、適用することを主張する。

以上の真実性についての主張を、スターリングは命題としてつぎのようにまとめる。

情報命題1：メッセージは真実でなければならない。真実性は資格ある観察者間の合意によって判断される。<sup>23)</sup>

情報の第2の属性「適合性」に移ろう。

スターリングは、「価値」という言葉に代えて「適合性」という用語を用いる。「すべての情報には価値があるが、しかしすべての情報が手元の特定の問題に対して適合性があるわけではない」<sup>24)</sup> (傍点一原文イタリック) として、特定の問題への適合性を重視するのである。そして、さきに見た「情報」と「コミュニケーション」の区別も、この観点からつぎのように言い替えられる。

「すべてのメッセージはコミュニケーションとして分類される。そして、情報はある特定の問題の解決に適合性があるメッセージに限定される。」<sup>25)</sup>

情報命題2はこのことが中心となる。

情報命題2：メッセージは適合性をもたねばならない。適合性はある特定の(個々の)問題に関係する。<sup>26)</sup>

だが、適合性を判断する上において、問題についての知識は必要条件だが、十分条件ではないという。つまり、それのみでは不十分であり追加の必要条件がいるというのである。追加の必要条件とは問題を考察する (viewed) 理論またはフレームワークである。

スターリングによれば、理論の一つの機能は「無数の複雑な観察から適合性

---

22) *Ibid.*, p. 44.

23) *Ibid.*, p. 46.

24) *Ibid.*, p. 47.

25) *Ibid.*, p. 48.

26) *Ibid.*, p. 48.

ある情報を選択すること」<sup>27)</sup>だとされる。代替的行動コースの選択でそのような機能を果たすものは、『意思決定理論』の他に『意思決定モデル』と呼ばれる<sup>28)</sup>。すなわち、適合性の判断には意思決定モデル（意思決定理論と同じ意味で用いられる）が必要だというのである。このことを一般化するとつぎの命題となる。

情報命題3：問題解決に関わる理論は、適合性ある情報を詳述する。<sup>29)</sup>

## (2) コミュニケーション

コミュニケーションにおいて問題とされるのは、「情報の量を最大化し、その情報のコストを最小化すること」<sup>30)</sup>である。情報の源泉とレシーバーは空間的に時間的に離れており、しかも伝達するためのチャンネル・キャパシティには限界がある。とくに、このチャンネル・キャパシティの限界は、「伝達すべき情報の適合性を主張する理由」<sup>31)</sup>だとされる。当然、伝達する情報を選択するのはトランスミッターである。ゆえに、

コミュニケーション命題1：適合性基準の所在(*locus*)は伝達源泉にある。<sup>32)</sup>

くわえて、伝達源泉にあるトランスミッターは2つの義務を果たさなくてはならないという。つぎなる命題である。

コミュニケーション命題2：トランスミッターは適切な理論を選択しなければならない。<sup>33)</sup>

コミュニケーション命題3：トランスミッターは関心ある対象 (*the object of concern*) から発生する問題状況に適用可能な意思決定理論の評価、改善、そして構築に積極的に従事しなければならない。<sup>34)</sup>

27) *Ibid.*, p. 49.

28) *Ibid.*, p. 49.

29) *Ibid.*, p. 50.

30) *Ibid.*, p. 50.

31) *Ibid.*, p. 51.

32) *Ibid.*, p. 54.

33) *Ibid.*, p. 56.

34) *Ibid.*, pp. 58-59.



つぎに、スターリングは情報を最大化するための命題に取り組む。スターリングは、情報が最大化されない2つの場合を指摘する。意味のない情報を多数が利用する場合、および有用な情報だが少数しか利用できない場合、である。とくに、後者がここでは問題とされる。たしかに、コミュニケーションを強化すること、すなわち専門用語の使用は情報を受け取るレシーバーの数を減少させる。それを防ぐためには、チャンネル・キャパシティのいくらかをレシーバーの教育に使う必要がある、という。スターリングは、つぎの命題を満たすことによって、より多くのレシーバーが有用な情報を利用できる、すなわち情報が最大化されるというのである。

コミュニケーション命題4：教育はチャンネル・キャパシティの配分において、高い優位性をもつ。<sup>35)</sup>

以上、情報とコミュニケーションについてのスターリングの主張を見てきた。その主張は命題という形でまとめられている。だがしかし、すべてが同様に扱われるのではない。「真实性と適合性が本質的な必要条件」<sup>36)</sup>だというように、情報命題の内容である真实性と適合性を第一義とする。そして、適合性基準を適用するための、意思決定理論の構築へと進むのである。

意思決定理論に移る前に、スターリングは測定について考察している。「測定」はスターリングにとって、論理の構成上大きな武器となっている。つぎにそれを見てみよう。

### 3. 「測定」についてのスターリングの主張

#### (1) 測定の一般命題

スターリングは、さきに「情報的内容」に着目して基準Iを設定した。ここでは、「なぜ『測定型』の情報を提供すべきか」<sup>37)</sup>という問題に取り組むこと

---

35) *Ibid.*, p. 61.

36) *Ibid.*, p. 61.

37) *Ibid.*, p. 65.

によって、測定がより多くの情報をもたらすことを明らかにする。

スターリングは、測定は比較の過程だとして、まずつぎなる命題を設定する。

測定命題1：測定の目的は、ある対象または事象と他の対象または事象とを、整理あるいは比較することである。<sup>38)</sup>

だがしかし、その比較には多様な特性が利用できる。その内のどれを測定すべきなのであろうか。測定に際して、「より基本的なことは尺度 (scale) またはディメンションの概念と定義」<sup>39)</sup>であり、測定を行うに先立ってまずそれが明らかにされねばならない。ゆえに、

測定命題2：ディメンションの構築と定義は、測定操作に対する必要条件である。<sup>40)</sup>

さらに、測定操作での単位と数字の使用の有利さをつぎのように述べている。

測定命題3：単位は対象の一般的比較を可能とする。よく知られた単位は異なる人々による測定値の一般的利用を可能にする。<sup>41)</sup>

測定命題4：数字の使用は、言葉による分類よりも、便利であり高い正確さを可能にする。<sup>42)</sup>

このように、ディメンションの決定と単位と数字の使用の必要性を明らかにしたうえで、測定操作の目的を数字の発見に置く。

測定命題5：測定操作の目的は、所与のスケール上の所与の対象の適切な位置 (placement) を発見することである。位置の一般的陳述は単位数 (numerosity of units) に換算される。<sup>43)</sup>

---

38) *Ibid.*, p. 72.

39) *Ibid.*, p. 75.

40) *Ibid.*, p. 75. スターリングは、ディメンションについて、「ある特性についての概念と、その特性を測定する (scaling) こと概念について便利な名称」 (*Ibid.*, p. 75.) だという。

41) *Ibid.*, p. 77.

42) *Ibid.*, p. 78.

43) *Ibid.*, p. 80.

スターリングは、以上のようにその測定理論の骨格を命題という形にまとめる。そして、測定はより多くの情報を提供するがゆえ、さきの基準Ⅰにかなうものだという。換言すれば、スターリングは積極的に「測定すべき」<sup>44)</sup>ことを主張するのである。だが、ここではディメンションについての詳細などは明らかにされていない。のちの課題として扱われる。

## (2) 測定の条件

スターリングは、測定に必要とされる条件についても述べている。そして、それはさきの4つの学派（評価係数）を選択する武器となっている。

まず測定操作の一般的条件である。

どのような方法で、どんな装置を用いて測定したか、すなわち測定の実態と装置を記述するだけでは、会計報告書の数字は意味のあるものにはならない。それに加えて、測定の一般的条件を明らかにすることが必要だという。さきの測定命題1が述べるように、測定の目的は比較である。この測定の目的に合致させるために、「測定の条件は、標準化するか調整を受ける (amenable) かなければならない」<sup>45)</sup>。この2方法の内、調整は多くの費用がかかり、また調整が不可能な場合があるという。それゆえ、スターリングは「標準化は避けられない。すべてのケースにおいて標準化は好ましい」<sup>46)</sup>という。すなわち、スターリングは測定条件の標準化、具体的にはデータの標準化が必要だと主張している。

一般的条件に加えて測定操作の時間的条件にも言及している。スターリングは、ここで現在価格の使用を主張する。

測定の目的が時間間隔間の変化を発見することならば、価格は変化するがゆえに、すなわち価格は瞬間的ゆえに、測定すべきでないという意見がある。スターリングはこれに反撃する。変化するという理由で価格を否定する学派も、

---

44) *Ibid.*, p. 80.

45) *Ibid.*, p. 86.

46) *Ibid.*, p. 88.

実際には価格、すなわち過去の価格を使用する。つまり、会計伝統は過去の価格を一定と仮定して使用する。このような過去の価格の肯定に対して、スターリングは、現在価格の変化という理由での批判は、時点を移せば過去の価格にもあてはまるという。両者の唯一の違いは過去の価格はすでに変化してしまったということである。くわえて、過去の価格を一定とすることは意思決定だという。しかも、この意思決定という点では、定数を提唱するボールディングも同様だという。すなわち、両者とも意思決定であるがゆえに測定ではない、とスターリングは主張するのである。

会計伝統が事象の比較であることにも焦点をあてる。会計伝統の評価係数は購入という事象での価格であり、そしてそれは売却という事象まで測定されない。このように、会計伝統は購入事象と売却事象の比較だという。そして、スターリングは事象の比較は利益測定には向かない、すなわち「利益を事象にわたる富の変化ではなく、時間の経過による富の変化と定義したがゆえに、事象の比較を考察から排除」<sup>47)</sup>できるとしている。会計伝統は事象の比較であり、事象の比較は利益の定義に合わないがゆえに、会計伝統は利益測定には適さないというのである。

さらに、スターリングは「測定と予言」の関係に言及することによって、利益測定ではないとするものを会計伝統以外にも拡げる。

スターリングによると、測定と利益の関係はつきのごとくである。

「測定の本来の目的は、将来の状態を予言する、または過去の状態を推測する (retrodict) ことであろう。しかし、このことは測定が現存する状態に関係し、そして予言は基本的に異なる性質からなるという事実を無視しない。」<sup>48)</sup>

測定と予言は関係をもちつつも、予言は「測定ではない」<sup>49)</sup>がゆえに、予言と測定を区別することを唱える。このことを基礎に、利益測定ではないものを

---

47) *Ibid.*, p. 94.

48) *Ibid.*, p. 95.

49) *Ibid.*, p. 98.

明らかにすることを試みる。

フィッシャー伝統では、富は割引いた予言であり、そして利益は2時点間の割引いた予言の差額とされる。このことはフィッシャー伝統が予言に基礎を置くことを意味する。スターリングは、予言は測定ではないというさきの主張から、「明らかにフィッシャー伝統は富の測定ではない」<sup>50)</sup>と結論するのである。

会計伝統では、ゴーイング・コンサーンを仮定することにより、過去の（購入）変換係数すなわち過去の価格を正当化している。このように、会計伝統は将来を仮定することによって予言することを回避している。だがしかし、会計伝統においては、そのような仮定が崩れ去ると「会計士の『測定値』は反実仮想の条件命題 (counterfactual conditional) であることが判明する」<sup>51)</sup>。

ボールディングも同様に、変換係数すなわち価格を将来にわたっても現在と同じく扱い、定数を導入する。だがしかし、将来が現在と同じでないならば定数は意味をなさない。スターリングはボールディングの定数も「反実仮想の条件命題 (counterfactual conditional) 」<sup>52)</sup> だという。

会計伝統もボールディングの定数も予言することは回避している。だがしかし、その回避の方法である仮定は、いったん崩れ去ってしまうと「反実仮想」に陥ってしまう。換言すれば、現実とは反対の事柄を想定した場合にのみ、その数値は成立するということになる。だが、それは現実とは相容れないものである。

現在市場については、「現在の状態 (state-of-being) を測定するために、将来を予言する（見積る）ことが必要だと感じる理由は明らかでない」<sup>53)</sup> というように、スターリングは予言の必要性に否定的な解釈を採っている。現在市場は、予言を必要とせず、それゆえに利益測定の適切な方法だというのである。

以上のように、スターリングは予言は測定ではないという主張を通して、現

---

50) *Ibid.*, p. 98.

51) *Ibid.*, p. 99.

52) *Ibid.*, p. 99.

53) *Ibid.*, p. 100.

在市場以外の3学派である、フィッシャー伝統、会計伝統、ホールディングの定数に対して、適切な利益測定方法の可能性を否定している。

最後に、「加法性」と「客観性」についてのスターリングの主張を見てみよう。

スターリングは、4学派ともが暗黙のうちに仮定する条件として、加法性をあげている。そして、「ディメンションの加法性という属性は絶対的な必要条件である」<sup>54)</sup>という。加法性は、ディメンション決定に際しての不可欠の条件だということである。

スターリングのいう客観性とは観察者の合意を意味している。

「観察者の合意は、知覚の正確さに対する普通のそして科学的な基準である。」<sup>55)</sup>

だが、この観察者の合意が無条件には客観性を保障しないことを、スターリングは指摘する。「『客観的な』もの、すなわち証拠だと知覚されるものは前もって形成された構造(preformed construct)によってかなり影響される」<sup>56)</sup>、換言すれば、理論構造を異にすれば知覚も異なるというのである。異なった(適切ではない)理論構造をもった観察者の合意は、客観性を保障しえないというわけである。

このように、スターリングは用いる理論によって客観性が左右されることを指摘することによって、ここでも意思決定理論構築の重要性、必要性を唱えている。

#### 4. スターリングの意思決定理論

さきの議論では、適合性基準の適用に先立って意思決定理論が必要なこと、そして測定に先立ってディメンションを示さねばならないこと、の2点が明らかになされた。スターリングは、このことを受けて、まずディメンションの決定に取り組む。

---

54) *Ibid.*, p.105. 原文に *abolute* とあるのは、*absolute* の誤植と思われる。

55) *Ibid.*, p.112.

56) *Ibid.*, p.114.

## (1) ディメンションの決定

ある財を高く評価するということは、必ず別の財を犠牲にするということの意味する。このことは、第一の評価命題とされる。

評価命題1：評価は、我々が別の財を獲得または維持するために、ある財を犠牲にすることを強いられる場合にのみ起こる。<sup>57)</sup>

現状の維持は、別の財の獲得という代替案を拒否することである。別の財を犠牲にして、現在の財を維持しているのである。そして、現状の維持という代替案は常に存在する。ゆえに命題1が示す評価は常時行われることを必要とする。

評価命題2：評価は全時点で行われている、継続的な活動である。<sup>58)</sup>

スターリングによると、ある代替案を選択することは、つぎのような意味をもつ。

評価命題3：現在の選択、すなわち選択された代替案は一見したところ拒否されたすべての代替案よりも価値がある。<sup>59)</sup>

だが、この命題の示す内容によると、選択された代替案の価値を測定することはできない。なぜならば、序数尺度 (ordinal scale) では各々の間隔がどれほどあいているかを知ることが不可能だからである。次善の代替案がわかり、それが基数的測定 (cardinal measurement) を受ける場合には、いくらか正確さを増す。たとえば、代替案AとBがあり、Aが選択される。その場合Bが5ブッシェルの小麦ならば、Aは5ブッシェルの小麦よりも価値が高いと断言する。このことからつぎの命題が引き出される。

評価命題4：ある財の価値は、次善の代替案の測定値と比較することによって序数的に (ordinally) 測定しうる。<sup>60)</sup>

ところで、スターリングによれば、価値は個人的予言に基づく個人的嗜好ゆ

---

57) *Ibid.*, p. 120.

58) *Ibid.*, p. 122.

59) *Ibid.*, p. 123.

60) *Ibid.*, p. 124.

え、本質的に序数尺度に限定されるという。しかも、序数尺度はさきの加法性というディメンションの必要条件を満たさないという。つまり、価値に取って代わる、基数的測定可能な代替物が必要だというのである。スターリングによれば、それは犠牲である。いわく、

「犠牲は基数的に測定できる。そしてそのような測定値は、犠牲の測定値の普遍性ゆえに、価値の測定値の有用性を増大するであろう。」<sup>61)</sup>

そして、その犠牲を一般的な形で示すものが、貨幣または財を支配できる権利 (command over goods) だとしている。

ところで、犠牲は時間的観点からは、1 過去の犠牲、2 現在の犠牲、3 事前の犠牲、4 事後の犠牲に分けられる。そして、この4つの「すべてが『真の』犠牲であり、そして評価は犠牲と密接に結びつくがゆえに、それらすべてが評価に使用できるだろう」<sup>62)</sup>という。ただし、その場合の評価と犠牲との時間的同一性については、これを強く主張する。

評価命題5：価値の時間的修正要因 (modifier) は、犠牲の時間的修正要因と一致しなければならない。<sup>63)</sup>

さらに、この4つの犠牲を論議することによって、評価命題5の意味するところを明らかにする。また、それは現在市場による評価への積極的な主張となっている。

まず、事後の犠牲についてである。評価（代替案のランク付けと選択）は、常に将来をにらんで行われる。だが、事後の犠牲は過去をふりかえることを意味する。すなわち、事後の犠牲は、ある問題には適合性はあろうが、現在の評価過程すなわち代替案の選択過程では利用可能ではないのである。ゆえに、事後の犠牲は除外できるという。

事前の犠牲は、評価過程には絶対必要である。だが、それは予言ゆえ測定で

---

61) *Ibid.*, p.124.

62) *Ibid.*, p.127.

63) *Ibid.*, p.127.



はない。測定可能なディメンションを求めるといふ、ここでの目的に対しては、事前の犠牲は除外可能だといふ。

過去の犠牲と現在の犠牲は、ともに評価であり、測定可能である。ただ時点を異にする。過去の犠牲は過去の評価である。現在の価値には適合性がない、つまり現在の評価過程（代替案の選択）には関係がない。

このように時間的同一性、すなわち評価命題5を踏まえて、つぎの結論となる。

評価命題 6 : 現在の価値は、現在の犠牲の測定によってのみ、序数的に (ordinally) 測定しうる。<sup>64)</sup>

以上のディメンションの議論を通して、スターリングは測定すべきものを決定しようとする。まず第一に、現在の犠牲のみが現在の評価に適合性があるとす。そのことは、現在の犠牲（ディメンションの観点では貨幣または財を支配できる権利）が利用可能な代替案を示すことを意味する。利用可能な代替案は経済的事象では具体的には市場価格によって与えられる。そして、スターリングは「利用可能な代替案はすべての意思決定に適合性があるがゆえに、市場価格はすべての意思決定に適合性がある」<sup>65)</sup>と述べることにより、現在価格を含めた市場価格の適合性を結論としている。明言はないが、現在の意思決定には現在価格である。

## (2) 意思決定理論——適合性基準の適用——

適用性基準の適用にあたっては意思決定理論またはモデルが必要とされる。スターリングは、小麦トレーダーを用いて意思決定理論を構築している。それは「トレーダー」と「他の利害関係をもつレシーバー」に分けてなされている。

まずは、トレーダーの意思決定理論である。

トレーダーになるといふ意思決定は、理由の如何にかかわらず、競合する企業

---

64) *Ibid.*, p. 130.

65) *Ibid.*, p. 132.

家活動からトレーダーになるという代替案が「最善の代替案」として選択されたことを意味する。この小麦トレーダーモデルが適用される限りは、この意思決定は継続されねばならない。別の意思決定には別のモデルが必要とされる。

さて、この小麦トレーダーモデルが最善とされる限り、意思決定は単純化される。つぎの2代替案に限定されるのである。

A. 小麦の保持

B. 現金の保持

Aの代替案、小麦の保持を選択することは、小麦を他のすべての代替案（消費、債権者の地位、現金等）よりも高く評価することを意味する。また、さきにこの小麦トレーダーモデルは最善とされ、そのことはこの2代替案が消費や債権者の地位等よりも高く評価されたことを意味する。それゆえ、現金も消費や債権者等の他の企業家活動よりも高く評価されたことになる。したがって、小麦の保持という代替案を選択することは、現金が次善の代替案であることを意味する。<sup>66)</sup>

この意思決定に際して、2つの代替案が適合性あるディメンションでもって等しく表わされるならば、各々の予想増加分が意思決定の基礎になる。たとえば、このモデルでは現金と小麦は変換係数すなわち価格で等号化される。トレーダーは小麦の増加分が多いと予想する場合には、現金よりも小麦を高く評価する。逆の場合も同様である。だがしかし、ここでは安定物価水準が仮定されているがゆえに、現金の効用は一定である。したがって、このことからつぎの基準が設定しうる。

最大化基準：小麦の現在価格があがるだろうと予想する場合にのみ、小麦を保持せよ。<sup>67)</sup>

この基準に従って意思決定をなす場合に、適合性をもつ情報はたった2つである。1. 予想される将来の財の状態 (state-of-being) と、2. 現在の犠牲であ

---

66) *Ibid.*, pp.133-4.

67) *Ibid.*, p.135.

る。小麦を保持するための現在の犠牲は小麦の現在価格によって与えられる。また、小麦の将来は価格変動によって知ることができる。それゆえ、この2ビットの情報はつきのように言い替える。

1. 予想される将来の価格
2. 現在価格

スターリングによって適合性がある情報とされるのは、この2ビットだけである。しかも、意思決定は継続的に行われなければならないゆえに、常にこの2ビットは適合性をもつとされる。<sup>68)</sup>

以上はトレーダーの事前の意思決定についてである。ところで、過去の意思決定を検証、評価することは、間接的に現在の意思決定に影響を与える。それゆえ、スターリングは過去の意思決定にも言及する。スターリングによれば、過去の意思決定の評価は  $P'_2 - P_2 = \text{誤り}$ 、という公式でもってなされる。ここで、 $P'_2$  は  $t_1$  時に予言される  $t_2$  時の変換係数を示し、 $P_2$  は  $t_2$  時の実際の変換係数を示す。具体的には、各々過去の価格と現在価格である。また、スターリングは、過去の意思決定の評価は最も新しいものから始めることが必要だという。それゆえ、過去の価格には最後の評価で用いた最新の価格を用いることを必要とする。換言すれば、トレーダーによる過去の意思決定の評価には、現在価格と最後の評価に用いた最新の価格が、必要とされる情報だということになる。<sup>69)</sup>

他の利害関係をもつレシーバーの意思決定理論に移ろう。

他の利害関係をもつレシーバーとは、経営者（トレーダー）以外の債権者、経営者とは分離した所有者、従業員等を意味する。

スターリングはまず、他の利害関係をもつレシーバーの意思決定を2つに分けることから始める。それは、企業の予想される将来に基づく意思決定と、そして企業の（現状を決定する）過去の活動に基づく意思決定である。

68) *Ibid.*, pp. 135-6.

69) *Ibid.*, pp. 137-41.

企業の予想される将来に基づく意思決定では、さきのトレーダーの場合で明らかにされたように、意思決定に際しては代替案の等式化と将来を予言することが必要とされる。それゆえ必要とされる情報はつぎのものである。

1. 現在の犠牲（代替案の等式化）
2. 代替案の予想される将来

トレーダーの場合は代替案は小麦対貨幣であった。ここでは、それに代えて企業対企業が代替案とされる。くわえて、トレーダーの場合と同様に等式化は変換係数でもって行われる。それゆえ1は、企業と企業の現在の変換係数と換言できる。ところで、企業と企業の変換係数とは、つまりは企業の要素同志の変換係数である。そして、それは、商品の現在価格と商品の量の2要素から構成される。すなわち、必要とされる情報、さきの1は、この2つに置き換えることが可能なのである。ここでも、現在価格は必要とされる情報の一部をなししている。<sup>70)</sup>

他の利害関係をもつレシーバーの行動によって、代替案の予想される将来という情報の内容は異なってくる。そのレシーバーの行動は、経営者の予言と自己の予言との比較と、経営者の成功についての予言という2つのものに分類できる。

経営者の予言と自己の予言を比較する場合には、他の利害関係をもつレシーバーは経営者すなわちトレーダーと同じ立場（「もし経営者ならば～するだろう」）に立つことができる。それゆえ、さきのトレーダーの場合に適合性あるとされた情報、すなわち現在価格と予想される将来の価格が必要とされる。ただし、経営者と他の場害関係をもつレシーバーの予想は異なるゆえ、予想される価格も異なる。それゆえつぎの情報が必要とされる。

1. (経営者と他の利害関係をもつレシーバーの両者の予言に適用可能な) 現在価格。
2. 他の利害関係をもつレシーバーの予想する将来の価格。

---

70) *Ibid.*, pp. 144-46.

### 3. 経営者の予想する将来の価格。<sup>71)</sup>

経営者の成功を予言する場合についてはどうであろうか。たとえば、投資者はどの経営者が成功するかを予言しなければならない。スターリングは、この種の予言は過去を証拠として行われると仮定する。この仮定に基づくと、将来を予言するために過去の証拠の収集が必要になる。その過程は、トレーダーによる過去の意思決定の場合と同じである。ただ、比較の基準は次善の代替的企業の経営者である。両方について、つぎの情報が必要とされる。

1. 最後の評価時の最新の価格。
2. 現在価格
3. 各々のポジション<sup>72)</sup>

なお、この部分は他の場害関係をもつトレーダーによる「過去の活動に基づく意思決定」の一部をも説明している。

以上のように、スターリングは意思決定理論を構築するという形でもって、適合性ある情報、必要とされる情報を明らかにする。そこには、伝達すべき最も重要な情報である現在価格が含まれている。「1ビットの情報がこれらすべての意思決定に適合性がある。すなわち、それは現在価格である」<sup>73)</sup>と結論されるのである。ここでは、現在市場以外の3学派を排撃するという方法ではなしに、現在価格を積極的に肯定するという方法によって、現在市場が最も適切な評価方法だという主張を展開するのである。

### III. 伝統的会計に対するスターリングの批判

スターリングは「現在市場」を適切な評価方法とした。そして、その他の評価方法すなわちフィッシャー伝統、会計伝統、ボールディングの定数は、適切

---

71) *Ibid.*, p. 147.

72) *Ibid.*, pp. 149-50. 「ポジション」についてスターリングは「(企業の一筆者) 現金の量と商品の量を決定しうる曲線上の点」(*Ibid.*, p. 147.) と説明している。

73) *Ibid.*, p. 156.

ではないとされた。ここでは、それらのうちスターリングが会計伝統と呼ぶものの、すなわち伝統的会計に焦点を当ててその主張を見ることにしたい。

歴史的な原価と配分を柱とする伝統的会計は長きにわたって会計の主流を占めてきた。その伝統的会計の排撃は、スターリングの主張する利益測定論を確立するうえで、間接的に大きな力となっている。換言すれば、スターリング会計理論は伝統的会計を排撃しえてこそ存在できるのである。それゆえ、ここにはスターリングの強い主張点があると考えられる。

スターリングは、「保守主義」と「原価」を会計伝統の中心ととらえる。とりわけ「保守主義」が重視されている。

スターリングによれば、保守主義は「最も古い、そしておそらく最も普及した評価のルール」<sup>74)</sup>であり、「会計における最も有力な評価原則」<sup>75)</sup>だとされる。このことは、他の原則たとえば原価、首尾一貫性、実現等と保守主義とが対立した場合に、他の原則が犯されても保守主義が優先されることによって示される。

スターリングは、つぎの仮説としてこれらをまとめている。

「保守主義は会計伝統における評価の基本原則である。」<sup>76)</sup>

「保守主義は前提、しばしばそれは暗黙のうちになされる、である。そして、他の評価ルールはそこから派生する。」<sup>77)</sup>

このことを基礎に、スターリングは原価について議論を進める。

原価は「ほとんど常に保守的な価値をもたらす」<sup>78)</sup>。また、さきのごとく原価と保守主義が対立した場合には保守主義が優先する。スターリングは、これらのことより原価は保守主義の派生物だという。つまり、原価はさきの2仮説を満たすというのである。「原価ルール」はつぎのように要約される。

---

74) *Ibid.*, p. 256.

75) *Ibid.*, p. 256.

76) *Ibid.*, p. 259.

77) *Ibid.*, p. 260.

78) *Ibid.*, p. 261.

「資産は、その資産を取得するために犠牲にされた資産と同じ大きさ (magnitude) で評価されることになっている。」<sup>79)</sup>

さらに、この原価ルールはつぎの2つの要素をもっているという。

- 「1. 非貨幣性資産 (non-cash assets) は、交換で犠牲にされた資産で最初に評価される。
2. 現金と現金等価物 (near-cash) は1 (unity) で評価される。」<sup>80)</sup>

スターリングは、このように原価ルールを説明したうえで、さきに自らが設定したモデルにそのルールを適用する。そのモデルでは原価ルールはつぎのようになる。

「小麦の価値は交換で与えられた現金額と等しく決められることになっている。現金は1 (unity) で評価することになっている。」<sup>81)</sup>

スターリングは、情報一測定基準の観点からこのルールを批判する。まず第一に、望まれる時点で情報が提供されないことをあげる。このルールは、交換の完成を待つことによって測定の問題を回避するが、逆にそのことによって望まれる時点での情報の提供を妨げられるという。第二に、これは事象の測定ゆえに時間的比較を妨げる、すなわちスターリングの利益概念とは相容れないという。第三に、「加法性」の観点から疑問を呈する。さきに見たごとく、スターリングによれば加法性はディメンションに絶対必要な属性だとされた。このモデルのルールに従えば、貸借対照表の総資産額 (小麦と現金の合計) は、小麦を購入しなかった場合に保有する金額、換言すれば小麦購入時点で保有した金額と同じになる。すなわち、小麦購入の如何にかかわらず、貸借対照表の総資産額は変化しないのである。スターリングは、そのような数字が適合性をもつのか、またそれがどのディメンションを測定するのか換言すれば測定するディメンションは加法性という属性を備えているのかは、不明だという。<sup>82)</sup>

---

79) *Ibid.*, p. 263.

80) *Ibid.*, p. 264.

81) *Ibid.*, p. 266.

82) *Ibid.*, pp. 266-8.

スターリングは、このように原価を直接に否定することに加えて、保守主義を批判することを通じて原価を排撃することを試みている。

会計伝統では、低価法に見られるように評価下げは容認される。だが、評価上げは認められない。このことは、さきに見たごとく保守主義が評価の基本原則だということを、具体的に示している。そして、このような会計伝統の評価方法はいわゆる秘密積立金を合理化する。この秘密積立金に対してスターリングは批判的である。すなわち、「測定—情報基準の観点からは、故意の過小表示は真実ではないことが明らかであり<sup>83)</sup>」、また「隠ぺいまたは秘密化の過程は、伝達概念 (the notion of informing) とは対照的である<sup>84)</sup>」というのである。

過小表示に対しては、真の測定値の存在範囲を知っているならば、その最低値を報告すべきだとする意見が一方である。だが、これは「原価」と「価値」の混同だと、スターリングはいう。いわく、

「大半の場合、会計伝統の目的は『原価』を測定することであり、『価値』を測定することではない、といわれる。すなわち、原価は価値と対比され、そして求められる属性は原価である。しかし、真の価値が報告数字を下回らない (no less than) ことを保証したいと思う場合に常に、求められる属性は『価値』であり、『原価』ではない。<sup>85)</sup> 「しかし、原価と価値の低い方を報告することは、2つの異なる属性の混同であり、我々はその手続きに対しては正当性を見出すことはない。<sup>86)</sup>」

スターリングは、このように過小表示を内容とする低価法は原価と価値の混同だという。低価法においては、求められる属性は「ある種の価値測定値<sup>87)</sup>」である。そのことは、「原価」主義を柱とする会計伝統とは相反するというのである。

---

83) *Ibid.*, p. 279.

84) *Ibid.*, p. 279.

85) *Ibid.*, p. 279.

86) *Ibid.*, p. 280.

87) *Ibid.*, p. 280.



以上のように、スターリングはまず保守主義を真実性に基づいて批判する。その批判は原価ルールへの否定へと展開されている。そして、それは会計伝統全体の否定となるのである。このスターリングの主張は、「保守主義は真実性の基準を犯し、それゆえ原価ルールは正当化されない」<sup>88)</sup>とまとめられている。つまり、原価ルールは保守主義の派生物ゆえ保守主義なくしては原価ルールはありえないということである。

また、「客観性」という観点からも原価に攻撃を加える。原価は客観的だという主張は、原価ルールを支える柱ともいうべきものである。

スターリングのいう客観性とは「観察者間の合意」である。そして、会計伝統は減価償却などに多様な方法をもつがゆえに、原価はこの観察者間の合意を得にくいという。そのことは現在価格との比較でもって示される。

「現在価格法は、歴史的原価法よりも多様性を生まないであろう。したがって、観察者間の合意という観点では、現在価格法はより客観的であろう。」<sup>89)</sup>

スターリングは、現在価格が原価より観察者間の合意を得やすい、すなわち客観的だということを「確信する」<sup>90)</sup>がゆえに、原価は主観的だと結論するのである。

なお、スターリング利益測定論の論理展開の構造を図示すれば、つぎのようになるであろう。(図、58頁参照)

#### IV. おわりに

スターリングは、時点間の差額という利益の定義を出発点に、適切な評価方法を「現在市場」すなわち現在価格とした。その選択には、情報、測定、意思

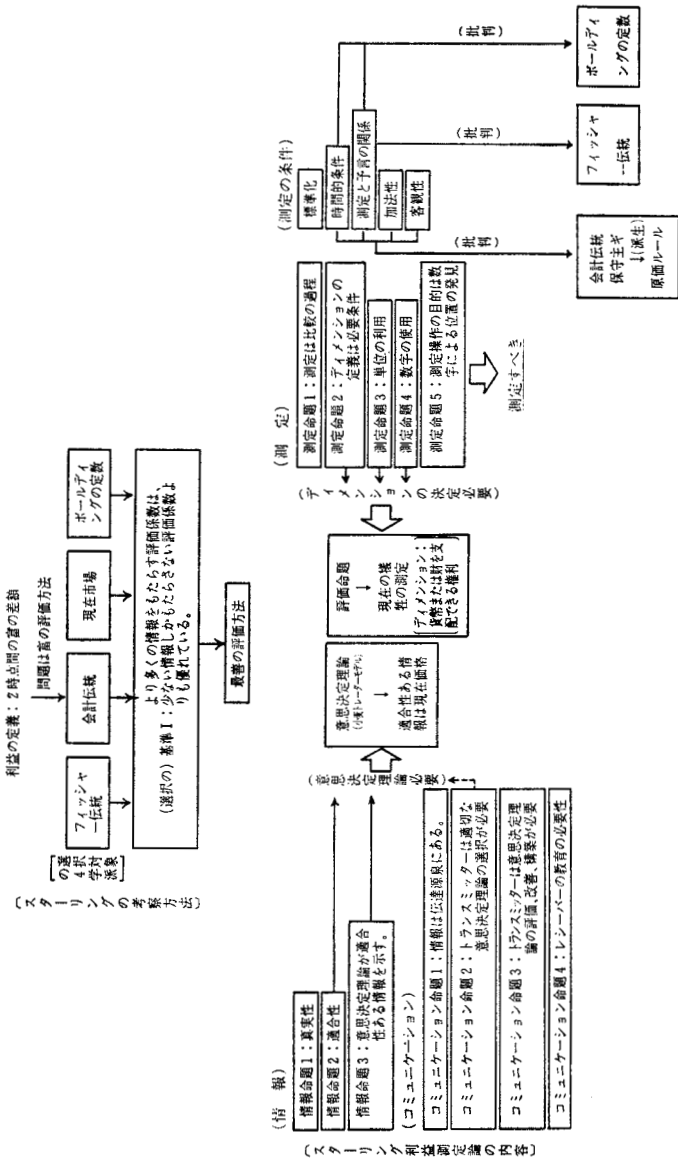
---

88) *Ibid.*, p. 280.

89) *Ibid.*, p. 302.

90) *Ibid.*, p. 312.

スターリング利益測定論の構造



決定の各々の理論が用いられた。では、そのようなスターリングの利益測定論は現実にはどのような意味をもつのであろうか。

現代の多様な会計実務は、もはや近代会計理論では合理化しえないところまできている。すなわち、現代実務を支えるためには、近代会計理論に代えて新たな会計理論が必要とされているのである。近代会計理論に取って代わろうとしている現代会計理論は多様である。そして、その主流をなすものが、アメリカ会計学会の『基礎的会計理論』に代表される情報会計理論である。だが、『基礎的会計理論』に代表されるとはいえ、その『基礎的会計理論』を支える多くの会計学者の理論が存在する。スターリングの利益測定論もその一つである。

スターリングは、現在価格での評価を主張することを通して、情報理論、意思決定理論を導入する。その情報理論、意思決定理論は、原価、配分を基礎とする近代会計理論とは相異なるものである。つまり、スターリングは情報理論、意思決定理論を導入することによって、近代会計理論を否定しようとするのである。そのようなスターリング理論の論理上の武器となっているのが、「加法性」や「観察者間の合意」といった新しい概念である。スターリングは、このような新しい概念を導入することによって、旧来の原価、配分といった概念に基礎を置く近代会計理論の枠組みを打破しようとするのである。そのことは、原価、配分といった近代会計理論の枠組みでもってでは合理化しえなくなった現代の多様な会計実務を、新しい概念、理論によって合理化することを意味する。このように、スターリングは、近代会計理論に代えて情報理論、意思決定理論を導入し、その論理でもって近代会計理論では合理化しえない現代の多様な会計実務を合理化することをねらいとしているのである。そこに、このスターリング利益測定論の現実的意味があるといえる。